

箏曲演奏家

早川智子 事 設楽智子氏 (高37期)



20絃箏独奏。

リハーサル時(ミュゼ川崎にて)

立高の皆様、こんにちは。在校時、私は音楽部に所属していました。中学生の時からはまっていた合唱に高校時代もどっぷり浸かっていた訳です。おかげで箏曲の師匠には、洋楽の(合唱の)発声と地歌の発声が違うと責められました。一方、ハーモニーの美しさ、アンサンブルの面白さ、曲の解釈、指揮者の役割等々、その後の音楽経験に生かせるヒントをたくさんもらっていたように思います。私は伝統音楽の演奏者としては珍しく、作曲家の書き下ろした五線譜をよみ、それを自分の楽器に合わせて翻訳し、指揮を見ながら演奏する現代曲(新曲)を演奏する機会が多かったので、合唱の経験はとても役にたちました。

日本独自の楽器を操り、五線譜を簡単によめるようになり、おかげで世界中の音楽家と触れ合うことができ、と、ここまで良かったのですが、ふと、「...で、私は何？」と立ち止まりました。私の専門は日本の伝統音楽の中でも地味な「地歌箏曲」です。やみくもに「古典は素晴らしい」と思い込まされて勉強し続けていましたが、本当だろうか...？ 人気が無いのはいけないものだから...？と疑うようになりました。理論的で無く、現代にそぐわないという評論家もいます。いっそやめてしまおうかと悩みました。



箏譜、三絃譜、五線譜。



箏「竜舌」(りゅうぜつ)。

唯一、自由に装飾できます。



三曲合奏。古典曲《尾上の松》

でも、これが良かったようです。実は今、古典(地歌箏曲)を知らずに伝統音楽の楽器(箏など)を扱う人が大変増えていて、前述のように簡単には理解しがたいものなので、楽器演奏の技術だけを学ぶ人が増えたからです。私は常に悩みながら考えていたため、世界の様々な音楽と私の身についたものがどう違って、どこに共通点があるのかがだんだん解ってきたようです。「箏の音色がこんなに美しいとは知らなかった。」「なつかしい音を聴いた。」といった感想をいただくと、「間違っていないな...」とホッとします。「地歌」という日本独自の歌を初めて聴いたという人も多いので、この伝統音楽を次世代に伝えられるよう精進しなければ...と痛感しています。今、私はこの魅力あふれる日本伝統音楽の伝承者の一人として、先人達に感謝しこれからも探求し続けようと思っています。

そしてもちろん合唱も大好きですから、(卒業後もしばらく「サンデーハーモニー」に籍をおいていました)音楽部のOB・OG会等にもできる限り出席して、皆様と時を忘れて歌い続けたいと思っています。